2020年05月08日 新潟日報 朝刊 広告２面 014頁

(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

未来のチカラ in 上越　つたえる　つながる　つかえる　新潟日報

挑め、上越。

Joetsu Challenger's INTERVIEW

上越チャレンジャーズインタビュー

#011 地域の魅力を、見つける、育てる、発信する。

特定非営利活動法人
かみえちご山里ファン倶楽部 事務局長
松川菜々子（39）

生まれも育ちも東京の松川菜々子さん(39歳)が上越市に来たのは2003年のこと。自然の中で仕事がしたいという一心で、この地へ。2009年にはNPO法人かみえちご山里ファン倶楽部の事務局長になり、現在は日本各地からやって来るスタッフとともに地域のために活躍中。細い体から地域愛があふれんばかりだ。

私たちのNPOは、上越市の西部中山間地域、通称「桑取谷」をフィールドに活動しています。2001年に地域住民ら80人が発起人となって、この地域を活性化し、美しい里山を残していきたいという思いから設立されました。地域の資源を守る、深める、創造することで、豊かな地域を育んでいくことを活動理念にしています。

NPOの活動の一つ目は、地域活動の支援です。過疎化と高齢化で途絶えつつある行事への協力や伝統技術・文化の記録を行いながら、外からの視点で地域の資源を発見し、発信しています。地域資源を活かした体験プログラムの企画、実施。古民家カフェやゲストハウスも運営しています。

二つ目は、上越市の委託で「上越市くわどり市民の森」と中ノ俣にある「上越市地球環境学校」の管理運営を行っています。市民の森では上越市の水源について学び、森を散策してもらい、廃校を利活用した地球環境学校では、上越市内の子どもたちをはじめ、多くの人が里山体験に訪れます。

三つ目は、地元の人たちに寄り添った活動です。高齢者を対象にした「お茶のみサロン」で介護予防の体操などを実施しています。また地元の子どもたちには生まれ育った地域を好きになり誇りに思ってもらえるよう「Uターン教育（地域教育）」を始めました。地域資源や地域の人と接する中で「自分たちが暮らしている場所って、田舎で何もないと思っていたけれど、実は、都会にはないものがここにはあるんだ」という気づきを促す。子どもたちが高校や大学進学で市外に出たとしても、いつか帰って来たいという意識を育めればと思っています。

四つ目は、「地域づくり」の活動に携わる人の育成です。ひとつ一つの活動は小規模ですが、活動を通して地域の暮らしに積極的に関わる人が増えれば、地域はもっとよくなると考えています。

この地域が脈々と受け継いできた自給の力。私たちは「まかないの力」と呼んでいますが、私のように東京で生まれ育った人間からすると、ものすごい魅力的な力です。その力を失わないように取り戻していくことが一番のテーマだと思っています。

こちらに来て感じたのは、学校で学んだことは大して役に立たず、今までの価値観がひっくり返るような暮らしぶりでした。もし災害などが起こっても、自給できる安心感があります。暮らしの中で必要な食べ物や道具などはまずは自分でつくる。買うという選択肢の前につくる知恵と技術、生み出す喜びがあります。

そしてここでは、景色の向こうに必ず人が見えます。自分の居住空間以外も手入れをすることで、地域を美しくしたいという思いが感じられるんです。それは、まさに地域づくりを体現していて、自分のためだけでなく、世のため、人のために生きていく地域の皆さんの姿勢から、NPOとしても自分自身としても多くを学ばせてもらっています。

地域で暮らすと、人と人のつながりが見えてきます。大学生のインターンシップを受け入れることがありますが、皆さん言うのは「自分のことしか見えていなかったのが、ここでの共同生活を通して他者が見えてくる。人と人が生きていくにはどうしたらよいか考えるようになった」と。人として生きることの原点を教えられます。何でもお金で買っていると余裕がなくなります。地域の人たちは自分でつくれるからちょっと多めにつくって、他の人にも分け与えることができる。どんな状況に遭遇しても不安がない。自分でつくれる、何とかできるという自負があるから。そして一人でできなければ、皆で助け合うという結（ゆい）の力、コミュニティの力を持っています。その力は少し前の日本には誰でも、どこにでも当たり前にあったものですが、合理性とか便利な世の中を求めるうちに手放してしまった力。このまま失ってはいけない、今こそ見直すべき大事な力だと思います。

私は西東京市で生まれ、両親は自然が好きで、小さいころからキャンプなどアウトドアに親しんできました。東京と言っても近所は畑や森もあり、茅葺屋根の家もあったくらいです。それが10年くらいの間に開発が進み、道路がたくさんできて、私が20歳のころにはまちの姿はだいぶ変わってしまいました。ふるさとと呼べるところが少しずつなくなり、子どものときの原体験を求めて、都会ではなく自然の中で仕事をしたいと考えるようになりました。故C・W・ニコル氏が創設したレンジャーを目指す（フィールドワークを身に着け、自然を守ることのできる人材を育成する）専門学校に入りました。

大学に入り就職するというそれまで考えていたレールから外れる怖さもあったのですが、入学してみると自然のフィールドで活躍しているさまざまな人と出会い、仕事のイメージは具体化されていきました。

卒業後の1年間は北海道の知床国立公園でネイチャーガイドとして働きました。自分の家の窓からシカの歩く姿が見えたり、秋になると目の前の川に鮭がのぼってきたり、森を歩けばときにヒグマと出くわすこともあったりと、まさに大自然の暮らしを満喫しました。でも、自然と人の距離がもっと近い場所「里山」で仕事がしたいと思い、探していたところ、こちらのNPOがスタッフを募集していたのです。全国で、ここだけと言っていいくらい。今もそうですが、非常勤やボランティアの募集はあっても、なかなか常勤の仕事はありません。

私が入った2003年は3人の応募があり、全員で8人のスタッフ。北は北海道、南は長崎と色々なところから集まり、地域活動に励みました。最初に面接に来たのが3月で、3mくらいの積雪がありました。事務所は雪で埋もれていていきなり雪かきから始まったのですが、掘っている間に夕方になってしまいました。知床も雪は降りますが、それ以上の衝撃でした。採用が決まり4月に来たら、今度は山菜がめきめきと伸びていく季節で、一瞬一瞬で変わっていくんだなぁと感動しました。来て早々、地域の方が「よってけよってけ」って、それぞれの家で歓迎会を開いて迎えてくれたことがうれしかったですね。毎日、山や田んぼや畑、それに海にも連れて行ってもらって、これが仕事でよいのかな？と思うくらいでも、地域の魅力を存分に感じることができた大切な時間で、それが今の活動につながっています。

市の委託事業は冬場のお給料が出ないので、冬はどこかへ出稼ぎに行くか、自分たちで仕事をつくるかという話になりました。もちろん、通年ここで働きたいと皆が思っていましたので、冬の仕事づくりに取りかかりました。初めに企画したのは、子どもたちに向けたかんじき作り体験。参加者は2人。知床のときは観光地なので黙っていても人が来るけれど、ここは観光地ではない、普通に暮らしの場がある里山。そこへどうやって人に来てもらうか。でも、ゼロからつくっていくことに、やりがいがありました。ひとつ一つのことを4～5年かけて精査しながら、活動の基盤ができていきました。

よく外から来た人に成功例のお話をと訊かれますが、成功よりも失敗の方が多くて（笑）。それはひとえにコミュニケーションカが足りなかったように思います。

ここならではのルールや礼儀などもありますが、他者への気遣い、おもんぱかること。基本的な人と人との接し方が都市の暮らしでは身についていなかった。ここでは「人でできることは限られているから、協力する、関係をつくることが大事なんです。何回「一升瓶を持って謝りに行ったことか。お酒で許してもらおうと（笑）。だから、新しいスタッフには言います。「いくら失敗してもいいから、思いきってやってみて。そして間違ったらきちんと謝ること。そうすれば地域の人もわかってくれる」って。

最初は、まずはこの地域のことを知ってもらおうと、とにかく週末に、いろんなイベントを開催しました。しかし、それが一過性で終わってしまうことに気づき、大勢の人に来てもらうことが目標なのではなく「ここが好き」と思って「通って来てくれる」人を増やしたいと、少しずつ方向転換し生まれたのが「学校」です。「棚田学校」や「ことこと村づくり学校」。棚田学校は、今年で17期目になります。田植えと稲刈りだけでなく、堆肥撒きや畔塗りなどの田ごしらえから始まり、自分の棚田を持って全8回で米づくりを学びます。参加者の中には開催日だけではなく、地域のお祭りや用水清掃などにも積極的に参加してくれる方もいて、いちムラ人として地域活動の一翼を担いつつあります。ことこと村づくり学校（古民家改修の学校）では約10年かけて、築180年の茅葺古民家を改修しました。地域の職人さん（大工に屋根屋に左官屋にと、家一軒建てられるほど職人さんがたくさんいます！）が先生です。改修後は地域内外の人が集う場所にできたらとカフェとして運営しています。助成金などをもらって業者にお願いすればあっという間に改修できますが、10年という時間をかけた価値はあると思います。参加者には古民家や土地への愛着が生まれ、できた後もボランティアで雪堀りに来てくださったり、カフェスタッフとして働いてくださったり。通いの方から移住へとつながるのが理想で、実際に移住に至ったケースもあります。だからと言って、移住が絶対ではありません。これからの地域づくりは、住んでいる人だけではなく、通いの人たちと一緒に新しいコミュニティをつくることも重要です。市街地から田んぼや畑を目的に通って来る「二地域居住」の方もいらっしゃって、町内活動にもちゃんと参加している。

地域に関わるさまざまな形が生まれています。そうした関係人口を増やし、あとは人口バランス。過疎化が進んでも若い世代の人が少しずつ増えたらいい。そのためには小中学校の存続や「Uターン教育」が要となる。地球環境学校に来ていた子が大学を卒業後、就職で上越市に帰って来たことを聞きました。地球環境学校での学びもUターンの理由の一つになったそうです。

とは言え、私たちの小さな活動だけで簡単に過疎化や高齢化の流れを止めることはできません。「時間が止まって」と思うけれど、それは叶わぬこと。NPOが始まった20年前に活躍していた方たちが80、90代になり、施設へ入られたり、亡くなられることも多くなってきました。地域の方から「お前たちが来たって、農家が増えるわけではないし、何のためにやっているんだ」ってお叱りを受けることもあります。何をもって地域活性化というのか、悩みはつきません。人口が増えればよい？産業ができればよい？それでも何もやらなければ、そのまま。だから、とにかくやってみよう」と。

地元の方にも同じ思いがあって、活動を支援してくださいます。地域の方は未来を悲観していないし、変化も恐れていないのです。皆さんが日々の暮らしを真っ当に力強く生きていらっしゃることが私たちの活動の原動力になっています。

日本中には、たくさんの里山があります。昨年から、ろうきんのCSR活動「森の学校」で、同じような取り組みをしている団体とつながる機会をいただきました。岐阜、福島、静岡、広島と、それぞれの場で活動している方と交流や情報交換ができるようになりました。

NPOのスタッフは活動を通して外とのつなぎ役になるのも重要な役割です。自分が1人目の移住者になるのではなく、2人目、3人目の人が「来たい」と思えるような仕組みをつくること。現在、NPOのスタッフは8人ですが、ほかにパートの人を入れると約30人の方が共に働いてくれています。通って来る方たちは、お米や野菜のつくり方や家の改修などのスキルを学ぶだけでなく、まちの暮らしでは得られない人とのつながり、心強い親せきができたように感じています。地域行事に参加するうちに責任感が芽生えて、それがやりがいになり、この地域がその人の居場所になっていきます。埼玉県出身でわら細工を生業にしたいと勉強中の若い女性もやって来て、これからの活躍が楽しみですし、応援もしていきたい。

これからの夢ですか。ここは地域の資源がいっぱいで、未来への生きた学びの場であり、可能性が広がっている。こんな時代だからこそ、このような場所にもっともっと目を向けてもらいたい。そのためにも、魅力あるこの桑取谷を発信し続けたいです。私たちと一緒に活動してくださるNPOの会員やスタッフを募集しています。ご興味のある方、ぜひお問い合わせください。

［Tel025-541-2602］

田中産業株式会社は、上越のさまざまな挑戦を応援します。